

令和元年10月31日現在

機関番号：34417

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26253098

研究課題名(和文) オレムのセルフケア理論を基盤とした「こどもセルフケア看護理論」の構築

研究課題名(英文) Development of "Children Self-Care Nursing Theory" based on Orem's Self-Care Deficit Nursing Theory

研究代表者

片田 範子 (KATADA, Noriko)

関西医科大学・看護学部・教授

研究者番号：80152677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,400,000円

研究成果の概要(和文)：オレムのセルフケア不足看護理論において、「セルフケアとは、個人が生命、健康、および安寧を維持するために自分自身のケアを行う存在である」ことを前提とし、これまで教育・研究で活用されてきた。しかし、理論で使用される用語の難解さから小児看護の実践で活用することが難しかった。今回構築した理論は、小児看護の教育研究者と臨床で活躍する看護師との協力で進め、難解とされた概念の再検討を加えながら、こども自身が持つセルフケア能力を適切に判断し、必要な支援を導く考え方や方略を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小児看護を実践する際の主たる対象はこどもであり、こどもの養育に責任を持つ親への支援も含まれることは、これまでも当然のこととされてきた。しかしながら、医療に限らず社会の中では、こどもの尊厳を守り主体性を尊重した選択が行われているとはいいがたい。当該研究にて構築した理論は、こどもがもつセルフケアに着目することから始まり、成長発達を見据えた周囲の支援のあり方を検討できる。本理論を実践に活用することで、こどもを主体とした支援者としての役割を明確に提示することができ、こどもを主体とする看護実践へと変革を期待できる理論であると考えている。

研究成果の概要(英文)：Orem's Self-Care Deficit Nursing Theory presuppose that "Self-care thus carries the dual connotation of care "for one self" and "given by one self"(p.43). And this theory has been utilized in education and research. However, since terms were difficult to understand, it was troublesome to apply to child-health care. Children Self-Care Nursing Theory were developed through cooperation between educator/researcher and clinical practitioners involved in child-health care. We reviewed concepts which were difficult to understand. We also tried to judge self-care ability of children appropriately and present approaches and strategies to lead required supports.

研究分野：理論看護学・小児看護学

キーワード：こども 補完されるセルフケア 看護実践 理論構築

## 1. 研究開始当初の背景

今日の医療制度改革において、その人らしく療養生活を送るために、人々自らが健康状態を知り、チーム医療の主体者として医療を活用する力が求められている。こどもを対象とする小児看護の場においても、専門病院から一般病院の診療別混合病棟さらに、支援体制の整っていない在宅や福祉施設など様々な現場での実践力が求められるようになってきた。

こどもは、身体的・精神的・社会的に発達途上の段階にあるため、周囲の大人は、各々の段階においてこどもの生活能力や主体性を適切に判断し、支援することが求められる。しかし、貧困や紛争、災害などの社会的環境によりこどもの主体性が保障されているとはいえず、医療においても課題が山積している。

こどもへの看護実践は、主体であるこどもとともに、養育に責任を持つ親または養育者への支援が必要となる。そのため、こどもと親がもつ力を適切にアセスメントし、その相互関係を常に着目しながら看護展開を行うこととなる。この二者間のアセスメントと介入の考え方や方略は、オレムのセルフケア不足看護理論を基盤に発展させることで明確になると考えた。

オレムのセルフケア理論は、「人は自分自身のケアを行う存在である」ことを前提とし、こどもも理論の活用対象としているが、具体的な展開方法が提示されていない。そのため、教育や自己管理やセルフマネジメントを必要とする成人期以降に焦点をあてた研究で活用されてきた。また、オレムの理論で使われる概念や文化的背景が異なるため、こどもを対象とする実践で活用することは難しいといわれてきたため、小児看護の臨床で活用できる理論構築が必要と考えた。

そのため、当該研究は、平成 25 年度の挑戦的萌芽研究「小児のセルフケア看護理論の構築に向けた必要要素の抽出によるモデルの作成」で得られた結果と、必要とする概念の再定義等を含めて検討し、小児専門看護師(以下 CNS と記す)と協同しながら臨床で活用できる理論構築を目指した。

## 2. 研究の目的

子どもの主体性を引出し、小児看護の実践に適応できる「こどもセルフケア看護理論」の構築することである。

## 3. 研究の方法

(1) 研究者によるオレムの理論の再検討：研究者間でオレムのセルフケア理論を精読し、こどもについて記載されている内容について検討を進めた。研究班毎ごとに理論の主要な考え方について検討し、全体会議で共通理解を図った。

(2) 理論構築に向けた意見交換：研究開始当初から進捗状況とともに検討課題について学術集会等で発表し、参加者と意見交換を行い理論の再検討を進めた。

(3) 小児看護 CNS との協同：理論で用いられる難解な用語やこどもへの実践のアプローチを具体的に示すため、これまでの実践事例の提供を依頼した。また、研究者間で検討を進めたモデル案を用いた介入を行った。

(4) 分析：小児看護 CNS による介入事例について、実践の概要と臨床での理論活用についてデータ収集を行い、理論構築を再検討すべき分析を進めた。

(5) 倫理的配慮：研究の主旨、目的、方法、研究参加への自由意志とプライバシーの遵守、事例提供にあたって同様の配慮を進めることについて文書にて依頼し、同意を得た。また、研究代表者の所属する大学と必要に応じて研究実施施設の倫理審査委員会での承認を得て行った。

## 4. 研究成果

### (1) こどもセルフケア看護理論の構成

既存のオレムのセルフケア不足看護理論を基盤として、こどもセルフケア看護理論の開発を行った。基本的なこどもの捉え方は、「こどもは人格と権利を持つ存在である」、「こどもは自らを発達させることができる存在である」、「こどもの生きる力(生きている力と生きていく力)に着目する」こととした(pp.23 - 26)。その上で、こどものセルフケア、こどものセルフケア不足、こどもへの看護支援からなる理論構成とした。以下に概要を示す。

#### こどものセルフケア

こどものセルフケアを「生きていくためにこども自身が自分のために意図的に遂行しなければならない、人間の調整機能を発達させる中で身につける能力と行動を含めた自発的行為である」と定義した。こどものセルフケア能力は、成長発達とともに変化していく。また、こどものセルフケアは、日々の生活の中で繰り返される学習と遂行により発達する。

親または養育者は、こどものセルフケア能力に応じた「こどもにとって補完される必要があるケア」を行うことが重要である。こどものセルフケアを判断し、適切な看護実践を導くために必要となる基本的条件付け要因・セルフケア能力の構造・セルフケア要件について提示した(pp.32 - 66)。

## こどものセルフケア不足

こどもにおけるセルフケア不足とは、成人と比較して未熟であると捉えるのではなく、「こども自身が本来的に期待される力を発揮してもまだこどもであるがゆえに必要なセルフケアが存在する状態」を示すことと定義した。親または養育者は、こどもにとって必要なケアを行う能力を持ち、積極的に関与する責任をもつ存在である。親または養育者の責任の下でケアを行う「ケア提供者」(祖父母等)とは異なることも明示した(pp.68 - 73)。

## こどもへの支援

こどもセルフケア看護理論において、6項目からなる看護者の役割とともに、アセスメントから看護の計画策定までの具体的な展開方法を示している。また、援助方法においては、こどものセルフケア行動を全面的に看護者が補う「全代償的看護システム」、こどもがセルフケア行動の一部しか遂行できない場合の「一部代償的看護システム」、こどもがセルフケア行動すべてを遂行できる場合の「支持・教育的(発達の)看護システム」の3つのタイプについても述べている(pp.76 - 128)。

上記に加え、こどもセルフケア看護理論において、家族は、基本的条件付け要因としてアセスメントを進めていく。アセスメントの結果、必要に応じて「こどものセルフケアを補完する親または養育者へのケア」や「家族システムを調整するケア」等を行うことが求められるため、家族システムに焦点をあてたケアの考え方、具体例を提示した(pp.130 - 164)。

## (2) こどもセルフケア看護理論の特徴とその意義

こどもセルフケア看護理論の特徴として「看護者は、こどもを第一義的なケア対象者として捉え、人格を持ち発達の只中にある存在と意識する。親または養育者の存在も必然不可欠であり、その双方を同時に看ることがこどもを看護することになる」など、6つの要点をあげている(pp.9 - 14)。

本理論の活用により、看護の専門性と責任、親または養育者が果たすべき役割についても明確に示すことができると考えている。今後、看護における活用を発端とし、こどもが生活する多様な場で支援にあたる専門職と考え方を共有することにより、互いの専門性を活用しながらこどもの豊かな育ちを目指したケアを導くことができると期待している(pp.29-30)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

原朱美、河俣あゆみ、三宅一代、及川郁子、加藤令子、勝田仁美、添田啓子、中野綾美、片田範子、オレムセルフケア理論を基盤とした「こどもセルフケア看護理論」の構築 - 理論構築に必要な課題の抽出と展望 -、日本小児看護学会第25回学術集会抄録集2015、p.141

〔学会発表〕(計 5 件)

日本小児看護学会第25回学術集会において、オレムセルフケア理論を基盤とした「こどもセルフケア看護理論」の構築 理論構築に必要な課題の抽出と展望を口演発表した。

日本小児看護学会第25回学術集会(2015)後のセミナー開催

開催テーマ:「こどもセルフケアカンファレンス」こどものセルフケアについて考えてみませんか～こどもの力を引き出す看護について、あなたの声を聞かせてください～として、本研究の主旨を説明し、教育・臨床での実践活動について報告した。

日本小児看護学会第26回学術集会にてテーマセッション開催

臨床で活躍する看護職や小児看護の教育研究者等が多く参加する小児看護学会の学術集会においてテーマセッション「2016 こどもセルフケアカンファレンス～こどもの力を引き出す看護を創りだそう～」を開催した。こどもにとってなぜ今セルフケアが必要なのかという問いを提示した上で、本研究において「こども」をどう捉えるか、「こどものセルフケア」とは何か、「こどものセルフケアの支援」とは、「こどもと親」をどう考えるのかについて概説した後、事例を用いた話題提供を行った。

日本小児看護学会第27回学術集会にてテーマセッション開催

テーマセッション「2017 こどもセルフケアカンファレンス～こどもの力を引き出す看護

を創りだそう～」を開催した。本理論の概説について説明した後、事例提供を行い小児看護においてセルフケアの考え方を導入することの効果と課題について参加者と意見交換を行った。

日本小児看護学会第 28 回学術集会にてテーマセッション開催

テーマセッション「2018 こどもセルフケアカンファレンス～こどもの力を引き出す看護を創りだそう～」を開催した。理論構築の進捗状況と共に、臨床で理論を活用した事例の話題提供を行った。

〔図書〕(計 1 件)

片田範子(編集)、有田直子、石浦光世、及川郁子、片田範子、勝田仁美、加藤令子、河俣あゆみ、栗林佑季、鎌田晃子、小室佳文、近藤美和子、笹山睦美、佐東美緒、添田啓子、高谷恭子、田村恵美、田村佳士枝、手塚園江、中野綾美、西川菜央、沼口知恵子、橋倉尚美、原朱美、眞鍋裕紀子、山崎麻朱、医学書院、こどもセルフケア看護理論、2019、240

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：及川 郁子

ローマ字氏名：(OIKAWA, Ikuko)

所属研究機関名：東京家政大学短期大学

部局名：短期大学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：90185174

研究分担者氏名：加藤 令子

ローマ字氏名：(KATO, Reiko)

所属研究機関名：関西医科大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70404902

研究分担者氏名：勝田 仁美  
ローマ字氏名：(KATSUDA, Hitomi)  
所属研究機関名：兵庫県立大学  
部局名：看護学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：00254475

研究分担者氏名：添田 啓子  
ローマ字氏名：(SOEDA, Keiko)  
所属研究機関名：埼玉県立大学  
部局名：保健医療福祉学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：70258903

研究分担者氏名：中野 綾美  
ローマ字氏名：(NAKANO, Ayami)  
所属研究機関名：高知県立大学  
部局名：看護学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：90172361

(2)研究協力者

書籍化に向けて協力を得た研究協力者のみを以下に記載する(順不同)。

研究協力者氏名：眞鍋 裕紀子  
ローマ字氏名：(MANABE, Yukiko)

研究協力者氏名：小室 佳文  
ローマ字氏名：(KOMURO, Kafumi)

研究協力者氏名：沼口 知恵子  
ローマ字氏名：(NUMAGUCHI, Chieko)

研究協力者氏名：田村 佳士枝  
ローマ字氏名：(TAMURA, Kajie)

研究協力者氏名：佐東 美緒  
ローマ字氏名：(SATO, Mio)

研究協力者氏名：高谷 恭子  
ローマ字氏名：(TAKATANI, Kyoko)

研究協力者氏名：有田 直子  
ローマ字氏名：(ARITA, Naoko)

研究協力者氏名：笹山 睦美  
ローマ字氏名：(SASAYAMA, Mutsumi)

研究協力者氏名：鍬田 晃子  
ローマ字氏名：(KUWATA, Akiko)

研究協力者氏名：石浦 光世

ローマ字氏名：(ISHIURA, Mitsuyo)

研究協力者氏名：近藤 美和子

ローマ字氏名：(KONDO, Miwako)

研究協力者氏名：西川 菜央

ローマ字氏名：(NISHIKAWA, Nao)

研究協力者氏名：山崎 麻朱

ローマ字氏名：(YAMAZAKI, Asami)

研究協力者氏名：栗林 佑季

ローマ字氏名：(KURIBAYASHI, Yuki)

研究協力者氏名：手塚 園江

ローマ字氏名：(TEZUKA, Sonoe)

研究協力者氏名：田村 恵美

ローマ字氏名：(TAMURA, Megumi)

研究協力者氏名：橋倉 尚美

ローマ字氏名：(HASHIKURA, Naomi)

研究協力者氏名：河俣 あゆみ

ローマ字氏名：(KAWAMATA, Ayumi)

研究協力者氏名：原 朱美

ローマ字氏名：(HARA, Akemi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。